

クチキコオロギ *Duolandrevus ivani* (Gorochov)

【選定理由】

本種は、♂・♀とも短翅で飛ぶことはできず移動能力に乏しいこと、一生に2年以上を要することなど安定した環境が必要である。しかし、本種の主たる生息地である常緑広葉樹林は伐採や土地造成のため減少しつつある。

また、自然的要因とも思われるが、沿岸部での一部の生息樹林の乾燥化が厳しさを増しているようで、本種の生息に圧力がかかっているようである。一方、本種は南方系の種であるため、気温上昇に伴い照葉樹林内の湿度が高い地域で生息環境が良好になりつつある可能性もある。

【形態】

体長は♂・♀とも25~31mm。体は艶のある暗茶褐色。体に比較して頭は大きい。翅は短く、かつては「オオズコバナコオロギ」という異名もあった。触角は長く体長の数倍はある。後脚腿節は太くその外側は淡茶褐色。内側は淡色で末端部は暗茶褐色となる。日中は樹皮下や石下などにひそむため体は扁平。

【分布の概要】

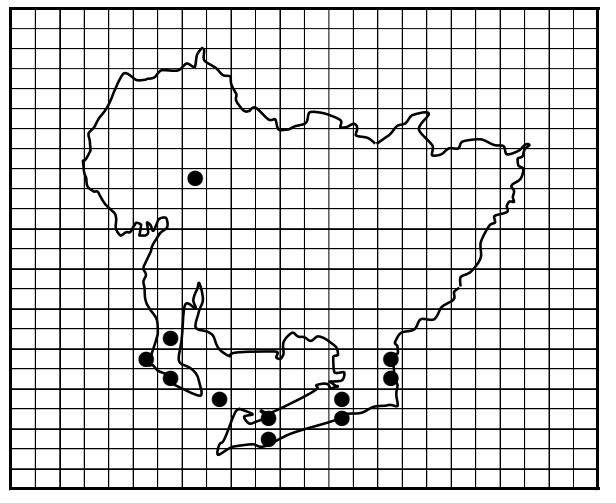
【県内の分布】

渥美半島、知多半島周辺に分布。静岡県との県境山地沿いに北上している可能性があるが確認はされていない。篠島には生息している(岡田, 1991)。名古屋市市内での生息が確認された(石川, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州。他に、小笠原諸島に1種、南西諸島に2~3種の近似種が知られている(市川・村井・本田, 2000)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主に常緑広葉樹林を好むが、杉林の中にもいる。林床にはある程度の湿気が必要で、乾燥しすぎると生息できなくなる。なお、田原市(旧田原町)の生息地は畑地を通る水路である。これは深さ1~2メートルで、壁面には草や小低木が生えている環境である。

夜行性で、日中は樹皮下や石下や崖の割れ目などにひそむ。幼虫、成虫ともに越冬する。気温の上昇や伐採樹木の移動などの諸要因により、生息地が拡大している可能性があるため、今後も注意深く調査する必要がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

各生息地の樹林は多かれ少なかれ乾燥気味で、環境は悪化しつつある。特に、篠島でその現象が明瞭。樹林内の多数の松が枯死し、風通しが良くなった分乾燥が進んだものと思われる。このため、篠島での個体数は減少している。

【保全上の留意点】

現在の生息地の樹林とともに林床の草・低木などもある程度残し、本種の活動・生息に必要な湿気が保たれるようにすること。下草刈りや枝打ちなどでの過度の整備は林床を乾燥させ、本種を駆逐することにもなるので注意が必要である。また、宅地開発や道路拡張による照葉樹林の減少を極力抑える必要がある。

【引用文献】

- 市川顕彦・村井貴史・本田恵里, 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 257-332.
- 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.
- 石川進一朗・石川みどり, 2018. 東山南部にてクチキコオロギを採集. 佳香蝶, 70 (274): 26.

【関連文献】

- 大野正男, 1976. 分布総説(2) クチキコオロギ(1). 昆虫と自然, 11 (12): 7-11.
- 大野正男, 1977. 分布総説(3) クチキコオロギ(2). 昆虫と自然, 12 (2): 16-20.
- 日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 176, 467-468. 北海道大学出版会, 札幌.
- 市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会(編), 日本産直翅類標準図鑑: 88, 253-254. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)